

# 六花

俳句雑誌

りつか

4

*designed by Tamako Tanaka*



訪  
戴



山田六甲

恋猫の声色をして追つ払ふ  
盲点を通り過ぎたる牡丹雪  
淡雪や古墳を踏んで天仰ぐ  
春秋やジャグジー風呂に身の弾み  
百年の孤独の耳よ沈丁花  
涅槃雪つもりさうなる降り方に

風花の止みたる青き豊かな  
温泉寺裏にまはれば風花す  
春水に取残されてをりし石  
しがらみにしがまれてゐる春の水  
源泉はしよつぱし熱し春の風邪  
朧月おぼろの傘に星ひとつ  
ひとの犬抱かせてもらふ山桜  
フエレットが甘噛みにくる朧かな  
蜂蜜に虫泳ぎゐる養花天

無鑑査同人作品

# 六 卿 集

(五十篇送り)

千年後

松山 律子

嗚呼三月 東京、大阪 大空襲  
鶯宿と云う梅の木に鳥はいない  
四月馬鹿つまらん事に感心し  
千年後三鬼忌なんてあるのかな  
私にはひと枝の花だけでいい

雪  
小田 元

大雪に楠の古木の幹太し  
大楠にみくじを結ぶ小正月  
小正月鎮守の楠の影ひとつ  
磨かれし神鈴鳴らす小正月  
雪積みて梅鉢紋の大庄屋

眉 月  
梶浦玲良子

臘梅の闇はるばると躍り口  
寒灯の一つが岸に戻り舟  
むささびの木に眉月のふらさがる  
山眠る日のでこぼこと針坊主  
畦ひとつ曲り損ねし毛糸玉

## 福寿草

木内美保子

口あけて風に首振る黄水仙  
 日だまりにひそと寄り添ふ福寿草  
 ペンだこの皺愛ほしむ風邪の夜  
 冬薔薇後姿にある意固地  
 山眠る寢息のやうな白い雲

## 次

中村 房枝

消ゆるまで次を吹かずにしやぼん玉  
 れんぎようや絵本の頁あけしまま  
 噛めば音すすれば音やあたたかし  
 麩饅頭まはつて来たる花筵  
 箸置を二つ求めて四月なり

十二月  
鳴海 清美

花枇杷や占ひの灯へ爪の紅  
本棚に百年の猫漱石忌  
穴掘つて何を埋めむ十二月  
背負はれて人の丈あり落葉籠  
曇り日の光蒐まり冬黄葉

お正月  
二瓶 洋子

神杉の雪のこぼれて鴉二羽  
大きくも小さくもなき注連飾る  
お正月掛け字贗作かも知れず  
ほろ酔ひの人のぶつかる古襖  
人込みを避けゐて風邪の神遠し

# 注連飾右へずらして又もどす

西塚 成代

元旦の空独り占め鳥一羽

器から器に移し寒の水

雪だるまほつそりなりし側頭部

新年の生花の前に母二人

注連飾（しめかざり）だからこそ、ほかの物に比べて最もその位置が気になるのだ。魔よけの意味もあるから、ことさら中心に飾り、魔をしつかりと防御して、新しい年を迎えようとする普遍的な心理を詠んだのがいい。沢山詠まれた材料だが、このような切り取り方もあったとは。

同人作品

# 楳木集



先さつき

武田 美由

ぱぴぷぺぽ春のはじける猫柳  
春泥やごめんなさいの言へない生徒こ  
とりあげしピアス返さむ卒業子  
花時計くるり回して生徒こを送る  
電信柱さつきは見えぬ春の雲

小年

信崎 和葉

松生花水引に満つ淑気かな  
大旦珈琲立てずにゐられない  
お雑煮の餅は一つと聞き直す  
七種やパクチーの香をかきまぜる  
産声をしかと聞きたる小年かな

酒 唄

田中 武彦

マラソンに敷やぶより太鼓打込めり  
元日に灰皿のなき机辺かな  
除雪せる雪が歩道にあふれ落つ  
吾が未来家族のみらい初暦  
蔵窓をもるる酒唄寒造り

# 菜根譚



# 六甲

ありあけの月取り残す初かるた

中野哲子

掲句、「ありあけの月」とは百人一首の八十一、「ほととぎす  
鳴きつる方をながむればただ有明の月ぞのこれる 後徳大寺左  
大臣」で、その下の句が一枚取残されているというのが句意で、  
そのほかに「有明の月」が、夜明けになお残る月だから、明け  
方まで歌留多取りに夢中になったという意味も掛けてあり、二  
重構造を持った句といえよう。

練習の成果上れり謡始

池崎るり子

「謡始」(うたいぞめ)は、歳時記には「謡初」とあり、「古  
い歳時記には、御謡始(おうたはじめ)の語がみえるものもあ  
るが、これらは幕府の行事に関するものであったから、一般に  
行われる謡初とは区別すべき」(大日本歳時記)とあるから「初  
をあてるのがいいだろう。それにしても、年初から練習の成果  
が上がったとは誠におめでたいという気持ちが詠み込んであり  
正月らしい句。

(以下略)

会員作品

平居 滢子

# 六花集



横山 迪子

ことり

凍てる夜や猫の寝息が刻きざむ  
老猫の夢追ふ視線冬の雲  
風花の舞ひのつそりと黒い猫  
くさめして洩水ずるりあららのら  
唇のよく動く女むとちゃんちゃんこ

子をあやす背中にマタイ受難曲  
イヴの夜のシルクの闇に息づかひ  
彫り物のドアに滞る寒夕焼  
読初す有史以前の物語  
大寒の磨けば細りゆく柱  
様々な声を覚えて年送る  
人肌に湯冷めを忘れさせられり  
見せられぬ顔を見られて寒の星  
露天湯に肌揺らめいて寒の星  
くちづけという酒のあり寒の明け